
ふぁいのこばなし

~ふぁい~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふあいのこばなし

【Nコード】

N7070J

【作者名】

〜ふあい〜

【あらすじ】

ふあいのこばなしを一本にまとめました。ばらばらで、ちぐはぐで、話と話は概ねなんの繋がりもないことは先に申し上げて置きます。

底

僕が見た中で一番の悪夢は、ひたすら落ち続ける夢だ。気がついたら、僕の体は空にいて、高さの二乗に比例した速度で落ちていくんだ。

さんざん落ちたあと、地面が見えて来る。

地面はもちろん硬そうなコンクリートだ。間違いない。

でも、必ずコンクリートすれすれの所で目が覚める。

夢オチの定石。

まあ、こんな夢は、今まで散々滑落して来た僕に相応しいのかもしれないな。

僕は石油会社の御曹司として生まれたのだが、自分の受験には悉く失敗。

それでも滑り止めの滑り止めに何とか入学したら、二日目に親の会社が倒産し、学費滞納で除籍。

苦し紛れに僕が就職しても、その小さい会社も倒産。その後4つの会社を渡るも、いずれも長続きせず。

年齢29にて、とうとうフリーターに。コンビニと工事現場とスーパ―を繋いでなんとか生活。

しかし、一年後、工事現場にて鉄パイプに足を挟まれ退職。仕事ができないがお金もなく。

「それで、おまえさん足が片方ないのか」

目の前のおっさんが僕に云う。

「まあな。義足なんて到底買えないから、杖をついてるんだ」

ここはとある公園の片隅。

底辺のテントが集積する場所。

僕はふと散歩をし、この場所を尋ねていた。

散歩と云っても、住んでいたアパートはさつき引き払ってきたから、いや、追い出されたから、帰る先は、ない。

だから公園のベンチでぼーっとしている所に、このおじさんが話かけてきたわけだ。

どうせ暇だったから、僕は僕が歩んできた転落の人生を話してきかせたんだ。

「それで？おまえもここに住まなきゃいけないってわけかい？」
おっさんが尋ねる。

「いや、さつきまではそのつもりだったが、もう良い。ここはど
う考えても社会の底辺。いや各々事情はあるのだとしても、やっぱり夢の底でしかないんだと思う。ここは、人である限りでは最後の場所さ。」

「僕の夢は必ず、底辺にたどり着くまえに覚めるんだ。だから、ここに住む前に、この人生を醒まさないとな」

僕はその足で13階建てのビルに登り、迷うことなく屋上から飛んだ。

さあ、夢は終わりだ。

確かに地面はそこにあつた筈だったが、いつのまにか、僕は何もない空の世界にいた。

地面は消え、外の全ての景色も消えた。ただ僕だけが存在し、いくらかの速度で落ち続けていた。

僕の有限の日々は終わって。

底のない場所に僕はたどり着いた。

僕はビルから飛び降りた時の感覚のまま。

いつまでも、いつまでも、落ち続けていくみたいなんだ。
なに、怖くないさ。

激突すべき底が存在しないんだから…。

青年の死体は直ぐに近くの住民に発見された。

あの時、底辺の寸前で拘泥していたあの青年に間違いがなかった。
でも、青年は底辺ではなくなった。

彼はもう、人ではなくなってしまったから。

どこまで落ち続けても、決して底辺にたどり着かないモノになっ
たようだ。

彼が最も恐れたもの、それは、世界の、人間の、そして自分の、
底辺だった。

底辺のない落ち続ける夢。

その恐ろしさに彼が気づいた時、彼が夢から覚める事は、もうな
い。

天気輪の柱

その日も、中に入ると、男は完全な静のなかに置かれたのです。

そこは、外の喧騒からは隔絶した場所。

見回すと、無限の創世界がそこら中に並べられていて。

男はその一つに入りこんで時間を忘れるのです。

そう。そこでは時間を忘れられるのです。

「ここには星の数の世界があるんだ。ぼくはもうすっかり……。」

けれど、星の数ほどある世界はまた、どれも彼にとっての永遠ではなく、彼を孤独にするのでした。

天気輪の柱から銀河の空へ旅した今日の彼にとっては尚一層の孤独でした。

……でも彼と創世界が完全には重なり得ないからこそ、永遠には重なり得ないからこそ、彼はまた、世界と重なるうとするのです。

それは孤独を紛らわすためでもあり、孤独を受け入れるためでもありました。

そこは、現実からの出発点であり、現実への着地点でもあったのです。

彼はきつと、そうやって現実から離れながら、現実を知ったのでしよう。

現実でも、やっぱり彼は孤独だけれど、でも誰ともぴったり重ならないからこそ、同じ方向を向けないからこそ、人を、この世界を好きになれる気がしたのでした。

彼がその世界から抜け出すと、やっぱりそこは音のない静の空間でした。

窓の外では、もう随分時間も経ったらしくて、すっかり夜になっていました。

彼は本をしまつと、外へ出て行きました。

都会の夜空には星なんてなくて、月だけが独り浮かんでいるのでした。

でも、だからこそ、月は随分世界を明るく照らしている気がしました。

彼は再び現実の喧騒の中に埋もれて行くのでした。

カプセル

遠い未来か、実は過去のこと……。
機械化がピークに達していた頃……。

その日のプレゼンはマスコミなども呼ばれ、大規模に行われた。

「さあ、皆様ようこそ今日は弊社のプレゼンに起こし下さいました。」

今日私が紹介するのはこの『オフィスIIカプセル』。弊社の科学技術の粋を集めて開発された物を、ついに製品化にこぎつけることができました。

これのすばらしい所は……」

この企業が開発した『オフィスIIカプセル』は、簡単に言うと、『仮想仕事場』をネットを通じて創るものであった。

このカプセルの中に入り、スイッチを入れると、脳神経に信号を送ることで、まるで本物のオフィスにいるかのような錯覚に陥る……。だけではなく、実際にオフィスで仕事をするのと同様に、実際には動くことなく、やるべき仕事をこなすことが出来るというのだ。

この、オフィスIIカプセルの普及により、社会人はみんな在宅『勤務』が可能になり、今あるようなオフィスIIビルは次々と消えていった。

各職業別ソフトウェアも次第に増えて行き、いつの間にか仕事は家でやるもの……となった。

そして、需要が頭打ちになった同社が次に開発したのは、子供向けソフトウェア、つまり、仮想教室であった。

同じカプセルだが、このソフトウェアを起動すれば、子供は家にいながらにして学校へ通えるのであった。

外気汚染が進行しているこの時代、子供をあまり外に出したがい親は歓迎し、これもまた普及して行った。

もちろんそれぞれ導入当初は批判もあった。…しかし、これのすごい所は仮想世界の中の人々は元々でいう同僚やクラスメイトであり、実際生活と何ら変わらないもの…と思わせる点であった。

やがて、人々は、ルーティンの多くを仮想世界のなかで行うようになった。

この状況に拍車をかけたのが、ネット上にできた、仮想世界『ソヴアイテリレベン』であった。これは、既出の各仮想空間とリンクし、全ての日常生活をその中で送ることができる、まさに『世界』であった。

これにより、人々はカプセルから出る煩わしさから解消された。

たくさんのカプセルが、世界中に並んでいる…。

その後、新たに生まれた子を自動的にカプセルに入れ、生まれた瞬間からその世界に生きられる装置を、誰かが仮想世界上で開発した。

百年が経った。

初めて『ツヴァイテリレベン』が現れた頃の人はもういない。生まれた瞬間からカプセルに入った人々ばかりになった。きっと、地球上のどこかに、たくさんのカプセルが並んでいる…。

当然と言うべきか、彼らは自分たちが生きているのが仮想世界だとは知らない。それを伝える人はもう皆死んでしまったから…。

ある（仮想世界の）会社に於いて。

「今日のプレゼンは気合いいれて行かなければな。我が社一代をかけたプロジェクトの製品かだからな。」

「社長。ディスプレイ用の完成品は、ステージのこのあたりでよろしいですか？」

「うむ。いい感じだ。これはコンピュータ産業の一つの革新となるだろう。」

ステージの右側に、人が入れるくらいの卵のカプセルが設置された。

終わることなく、最初に戻る。

海月

『入学おめでとございます!!』

校長先生の話が始まる。長い話をしてから挨拶をして舞台から降りていく。お母さんたちが拍手をしているから、私も拍手をした。

私の名前は、田山春菜。今日から小学一年生になるんだ。

でも、入学式っておもんない。校長先生っていう人の話を聞いて、お歌を歌うだけ。その歌は、なんだか難しくて、わかんない。『こーか』っていうんだって。こーかって変な名前。そのお歌、幼稚園で先生と歌った歌とぜんぜん違う。うさぎさんも、お花も出てこない。何だか暗いお歌だから私は、何だか嫌いだなあって思った。

また先生の話が始まったから、もううんざり。誰かとお話したいなあ。

でも、私は隣町から引越してきたから友達がない。喋る子もいなくて、つまんない。仕方がないから、隣に座ってるこにでも話しかけようかなあ……。その子がこつちを見たから、私は、ニッコリ笑っていった。

「ねえねえ、お名前、何ていうの。」

隣の子は、ニッコツと笑って、私の手を握った。

「私の名前ねえ、春嘉っていうよ。松崎春嘉。あなたのお名前はな

あに?。」

「わあ。私の名前、田山春菜だよ。春嘉と春菜って、似てる。お話ししようよ。」

私と春嘉は、もう一人の子も誘った。その子は加賀稚由実という、凄く可愛い子だった。肌が真っ白で、髪の毛もさらさらで、凄く綺麗だった。

心中なる世界

二人は出口も何もない白い部屋にいた。

「あれ、なんだここ。」

先に身を起こした男が辺りを見回す。当然のことながら、事情が飲み込めないようだった。

「何があつたんだ？」

男が起き上がろうとした時、二人が小指と小指を指切りのようにつないでいることに気付いた。

じきに女も目覚め、二人は壁際に寄り掛かって座った。お互い断片的な遠い過去のそれを除いて、ほとんどの記憶を失っていた。

だけど、二人が互いを深く愛し合っていた事だけは、感覚的に確信していた。そして、その想いは今も変わっていなかった。

二人はどうすればいいかわからなかったが、完全な密閉空間にいるにもかかわらず、妙に落ち着いていた。

二、三時間が経つただろうか。状況は何も変わっていない。二人何か話そうにも、具体的な記憶が全くなっていたため、どうもう

まく行かなかった。

そこには二人しかいない。誰かに監視されているわけでもなさそう
だ。

男はそつと女の肩に手をまわし、たぶん愛しているだろうその女に
キスをした。

記憶はないけれど、それは

「いつものこと」のように思えた。

そして

「いつものこと」はキスだけで終わりじゃないということも、二人
は感じていた。ためらうことなく、心の欲求に二人は応じていった
…。

不思議なことに、体は疲労を全く感じるものがなく、眠くもならず、
お腹もすかなかった。

二人は思う存分、その永遠とも思える時間を楽しんだ。

その時間は二人にとって最も幸せな時間のように感じた。

「いつものこと」をしているのだけど、

「いつも」より自由に、全力でお互いを愛せていたような気がした。

それからも、二人は何度も

「いつものこと」をした。

長い長い時間過ぎた。

感情が前ほど高ぶらなくなったことに先に気付いたのは男の方だった。

なんだろう。この感じ。飽きてしまったのだろうか…。確かにそこかもしれない…。だけど、そうと言うより、なんだか彼女といること

「実感」がわからないような…。しているのはオレ自身のハズなのに、外から見ている傍観者のような…。

先に口を開いたのは女の方だった。

幾度目かの行為の最中に…

「…ねえ。」いつしか互いの名前さえも忘れていた。

「なんか最近、つまらない…よね？なんかこう、前ほどの一体感と
いうか、親密感を感じないというか…さ。」

「…うん。」

それはまさに男も感じていることだった。

かといって、他にやることがないのもまた事実だった。

相変わらず部屋には何もなくて、記憶も完全に無くなっていた。

少しずつ不感症になるの感じながら、二人は別れが近付いているのを感じた。なんだかわからないが、もうすぐ、この真っ白な部屋を出る時が来るような気がしていた。

「ねえ、まだオレのこと好き？」

「…うん」

二人はまだ二人の記憶がある内に、最後のキスをして、小指と小指をつないだ。

「またね。」

それから半時も待たず、二人の記憶は完全に消し去られた。

想いが、リセットされた。

その時、突然白い部屋の壁が消える。二人は無心のままその景色を眺めていたが、やがてそれぞれ、眩しい光に包まれていった…。

それは、遠い昔二人がいた所と同じ、この世界の光だった…。

2008年1月26日午前1時20分頃、都内の病院で男の子が生まれた。母子共に健康で、特に問題はなかったが、その赤ちゃんはしばらくの間、右の小指を立てていたという。

その約一時間後、別の病院では女の子が生まれた。もちろんその赤ちゃんは、左手の小指を立てていた。

またね…。

……また、新しい一生が始まる……

夢が覚めた時の世界

曰く、

みなさんはいまいる世界が昨日とどこか違うと感じたことはありませんか？いつも会うハズの人、いつも見るハズの景色なんかが、何となく違うように感じる事が。

まあ、たいていの人はうなづきにくいでしょうし、たとえ感じたことがあっても、気のせいで片付けることでしょうかね。

でも、それ、実は正解なんです。

人は、眠った時に、その日の肉体を離れて、違う次元の、同じような違う世界に移るのです。

みなさんがあたりまえに感じているこの世界は、実はとっても不安定なもの。人間的な時間感覚でいえば、数日もてばいい方なんです。

だから、人間は、いいえおそらく、この世界の全ての生き物は、日々その殻である肉体を取り換え、生きる世界を取り換えることで長い時間、魂としては生き長らえることを可能にしたのです。言っ
てしまえば、肉体自体はほぼ毎日死んでいるのです。

さて、そろそろみなさん大きな疑問を抱くことでしょうか？
じゃあ徹夜したらどうするんだと。

ある程度大人の方なら、その人生で一度くらいは全く寝なかつたよるがあるのではないでしょうか。

でも実はそれ、とっても危険なことなのです。なぜなら徹夜し

た人だけが同じ世界に次の日も取り残されるからです。

徹夜明けの次の日、何となくぼーっとしたり、怠かったりするのはいくつか理由があります。

一つは肉体が普段の使用期間をこえているからです。いわば賞味期限は切れたけどなんとか食べられる食材のようなものです。

そしてもう一つは、まわりの人々、生き物はすでに魂が別次元に行った抜け殻だからです。

この殻たちはかつて宿った魂の残り香のようなもので、一応殻だけになっても活動します。その様子が、まだ魂の宿るあなたからすれば、みんながいつも通り活動してる、でもどこか実のないような、虚ろなように見え、それがさもあなた自身のたるさやぼーっとした感じであるかのように知覚されるのです。

使用期間を過ぎた世界に使用期間を過ぎた肉体で残ることは、いずれかの原因で、あなたに本当の死をもたらすリスクを高めます。

いずれかがその限界を越えて崩壊してしまえば、世界を移る手続きを怠った魂は次の世界に行けず、そこで本当の死をむかえるからです。

その死は様々な形で現れます、人間から見れば、事故死だったり、病死だったり。それは上にあてはまらない普通の死と見分けはつきませんが、実はそういう理由だったりします。

徹夜し続ければ死んでしまうのも、至極当然と言う訳です。

みなさんも肉体や世界の崩壊にまきこまれないように、あまり無理をしないようにしましょう。

イト

人は無数の糸に絡めとられて生きている。

運命やら関係やら何やらの糸に。

ある日男は夢を見た。蜘蛛の糸をひらりとかわして自由にひらひらと飛ぶ夢を。

夢の中でこんな言葉を思い出したと言う。

「これは僕の夢なのか。それとも今迄僕が現実と信じていたものが、この蝶の見る夢なのか…。」

男は感じた。蜘蛛の糸に絡めとられた『現実』になんの意味があるのだろうか。と。

目が覚めると男は再びたくさん糸に絡められていた。少なくとも彼はそう思った。

彼は自分を捉えている糸が見えるような気がした、

男は決心した。いつかはこのいまましい糸を一つ一つ解放し、いつかは自由に世界を生きると。

その日男は、遅刻ギリギリの時間に会社についた。

オフィスのドアを開けると部長が顔をしかめて彼をにらみ付ける。

「相変わらずギリギリだね。君は。君は早目の行動と言つ言葉をしないのかね…全く……」
遅刻はしていないにも拘らずこの嫌味。

それが終われば既に用意されている山のような仕事、定例会議、休憩時間かと思えば、上司からの休日の誘い…。普段の日々にあきたらず、休日すら奪う『会社』に絡めとられた男。彼はその夢から早く覚めることを決心した。

次の日、彼はその場に来なくなった。『会社』の夢から覚めたのだ。

その日、男の家に彼女がやってきた。彼は自分の愛する彼女は自らを絡める存在ではないと信じていた。

甘かった。

一度始めてみれば繰り返される『愛してる』。お互いがお互いを愛することを強制するかの如き『愛』を男は捉えてしまった。

彼は彼女の愛に絡めとられていた。

小指を切つてしまいたい気なつた。と言つ。

その後彼は彼女とつながっているもの糸を全て切つた。それを『夢』だと決め付けた彼にとって『想い』の糸を断ち切ることはむしろ必然であつた。

女すら切った彼だから、友人との糸など切るのはいともたやすかった。

彼は全ての人の糸をそのはさみで切った。これで大丈夫だろうか……僕は自由になれただろうか……。

その時だった。

つけていたテレビは今日のニュースを伝えていた。

その日の政治家の失言、その日の殺人事件、その日のスポーツの結果。

その度に彼の思考はいろいろなことを考えていた。

「こいつは……なぜ人がどう反応するか気をつけてものを言わないのだろう……」

うわ、通り魔なんて恐ろしい……気をつけないと……

また、あのチーム負けたのか……もう今年の優勝は無理かな……」
気付いたのは半刻後

僕は情報に絡めとられていた。

思考は世間がながす一方通行の情報に従属してしまう。これでは自由になんてなれない……。

彼はテレビとパソコンを棄て、新聞を解約した。

その後彼が聞いた音。すっきりした部屋で聞いた音。

一秒ごとに刻まれる、壁に掛かった時の音。彼の生活に規則を与え
る刻ときの音。生活を縛る刻の音…。

彼はついでに、刻の判るものを全て棄てた。…現代世界は実に多く
の多くの糸で人を縛っている。

人間、情報、時間…そして、

彼は冷蔵庫の上の財布を見た。

…そして、お金……

ここには、この現代世界には、僕は糸を全て断ち切ることは
出来ない…

それから何日かがたって。彼はどこかの島にいた。どこの島かは彼
が知られるのを拒んでいるから言えないが…。

そこは社会から隔絶された所。彼は現代社会の糸から解放された。

ここには自分を縛るものは何もない。自分だけの自然なありのまま
の自分だけの時間が流れている。

僕は、自由になった。

と生きていたけれど…。

僕は僕の意味に関係なく、食を欲し、睡眠を欲す。無理をすれば体は疲れ、つまずき転べば血を流す……。

僕は『生』に絡めとられている……それならば……。目の前には広大な海が広がっていた。

猫の島を歩いた時のエッセイ

階段の縁に、猫がうずくまっていた。

僕が降りながら口笛を吹くと、猫は音もなくすり寄って来た。

何か落ち着かないのだけど、決して逃げはせず、なでるとそれなりに心地良さそうだった。

その日、僕はちよつと遠出をしたのだった。

橋を歩いて、渡って行ける島にいた。

そこは普段僕が過ぐす都会とは異なる所。

道は狭い階段と坂ばかりで、車も自転車もない島。

でも、そんな坂の途中にも民家があつて、誰かの日常があつたりした。

それはもちろん人間であるけど、時にはそうでなかったりする。

この島には猫が多く。

彼らは我が物顔で、坂の途中やら鳥居の根元やら時にはベンチやらにうずくまったり、寝そべったりしている。

それはきつと、彼らの日常なんだろう。

僕にすり寄ってくるこの猫もまた、その階段の縁をいつもバランスをとって歩いているだろうことは、想像に難くなかった。

彼は撫でるのをやめると、僕のまわりをぐるぐるまわる。すり寄ってくる。

落ち着きはなく。しかし、離れようとはしない。

そこには、僕に対する好奇心が感じられた気がした。僕もまたその猫に愛着がわいていた。

…少し羨しくもあつた。

しかし、しばらくそいつと一緒にいたら、暗くなって来たので、僕は階段を降りて行った。帰路につかなければ。

すると、猫は僕のあとをついて来た。僕に何かあるのだろうか。少しだけ距離を置いてついて来る。ゆっくりだけど確実に。

やがて、島唯一の車道に出ると僕は橋の方へ向かった。

そこは先程の階段と比べると、土産屋なんかがあって、人通りもそれなりにあった。

時間的に、橋を渡って陸に帰るらしき人が多かった。

しかし、猫は、まだついてくる。

橋をも渡るのだろうか。

その先はキミの居場所じゃないだろ。キミはいつもあの坂や階段だらけの道を行き来して、踊り場で寝そべったりしてるんだろ。

しかし、やがて、僕が橋に差し掛かると、猫は何かに言われたかのように、橋の付け根。島の入口のところまで足を止め、前脚を揃えて座った。しっぽをゆらゆらさせていた気がした。

僕を猫の目で見ていた。

僕は手を振るかわり、二回口笛を吹いた。

そして、橋の向こうへ。

僕は僕の普段へ帰って行った。

猫は猫の普段の縁に座っていた。

観察日記

その日一番のニュースは、新型のインフルエンザウイルスが世界中で大流行し始め、近年まれに見る罹患者数、死者数を記録したと言ったものだった。

今回のこのウイルスの特徴は、何と言ってもその感染力、そして生命力だった。クラスに一人感染者がいれば、たちまちクラス中に伝染する程の空気感染力で、一度かかってしまうと、適切な処置をほどこしたとしても、解熱に二週間かかるのだとか。さて、その頃、植物を研究している学者の中で話題になっていることがあった。

遺伝的にそれほど似通っている訳でもないいくつかの種子植物の種が、異常に硬くなっているのだという。

特に、裸子植物では顕著で、マツの種に至っては電動ドリルでも傷がつかないほどだそう。

また、これはまだ観察段階なのだが、これらの種子は高い耐熱性や耐圧性などをもち、過酷な環境では、出芽はしないのに、その形や機能を保ったままであることが出来るかもしれないという。

これは植物研究の世界ではかなり特異な出来事だったが、先のインフルエンザのニュースの影に隠れて、一般人に広まることはほとんどなかった。

その後、生物学界では様々な特異な出来ごとが、あらゆる種類の生物でおこっていった。成虫昆虫の激減、魚類の異常繁殖、鳥類、爬虫類の卵の異常硬化など、数をあげればキリがない。

学者たちは、その原因を日夜調べたが、誰もそれら一連のできごとに納得の行く解を与えることはできなかった

そんな矢先、その日は起こった。

経済、石油、宗教、国のエゴなどあらゆるものがおりまざった戦争が泥沼化し、ついにその日、同時に四つの核が世界をつつみこんだ。

人々は地球滅亡という言葉を思い浮かべながら、その歴史を閉じた。

しかし、滅亡したのは専ら人類と一部の種の生物にすぎなかった。

多くの生物は、本能的な意味で気付いていた。その日が近づいていることに。人間がいつのまにか発していたなにかをメッセージとして受けとり、その日の為に自らを変異させていた。

人間だけが、その変異の意味にきづけなかった。変われなかったということだ。

真夏の夜

金縛り。

金縛り……。。

指一つ動かない…動けない

男は靈感みたいなものが或るわけではなかったが、何故か金縛りに遭うことが多かった。

今夜もその喩えよりの無い重圧感、圧迫感に、為す術は無かった。

「またかよ」男は開かない唇の奥の方でそう呟く。この現象に無駄な恐怖心を抱くことはもう無くなったが。それでもやはり、心地良いものではない。

「でも、まあ…その内おさまるだろう。」

ある種の余裕の様な諦めの様な気持ちで男は只、横たわっていた。

そのまま、幾分の時間が経った頃…

たん……たん……たん…

外で階段を登る音…

男が寝ているのは全部で6室あるアパートの201号室の階段のすぐ側の部屋だった。

「隣りの人が帰って来たのかな…。」

3 段位、登る音を聞いた後、男の体は解放された。

そして、音はそこで跡切れた…

「あれっ」と多少気にはなったものの、もう夜中だったので、男は再度眠りにつこうとした。

そして瞼を閉じた時、再びあの硬直がやってきた。

「……………」

硬直が自分の睡眠を阻害することに苛々しながら、男は再び解放を待った…。

すると…たん…たん…たん…たん…

たん……………たん……………

丁度さつきと同じような靴音が外から聞こえてきた。

「また、二階の部屋の人か、随分遅いお帰りで…」

そう思っていると、再び体は解放された。

…と、同時に、靴音は跡切れた…

体が解放されて、ゆっくりと寝返りをうつたとき、男はふと思いで出した。

男が住むアパートの二階は、現在男しか住んでいないことに……

すると、間もなく、三度、体は固まった。

これほどなんども続くことは今迄無かった。男は硬直したその体の背に、冷たいものを感じた。

たん……たん……たん……

たん……たん……たん……

たん……たん……たん……

今度は、足音はなかなか跡切れない……

そして、階段を上りきったと思しき所で、音はピタッと止まった。

男の部屋の前で止まったように聞こえた。

……しかし、体は未だ解放されなかった

がちやり。

足音が室内に入ってきたことを感じた男は、動かない体をどうにか解こうとするが、ムダだった。叫び声も、上がらない。

ひた……ひた……

何者かはついに男の寝る寝室に現れた。手にはなにかキラリと光るものが握られていた……

体は動かない。動かない。それが更に恐怖心を掻立てた。

真暗な部屋で男がその光る物を刃物だと認識したのは、何者かがすでにベッド際でそれを高く振り上げている時だった。

男は思わず眼を閉じた…。

気配が消えた

男が恐る恐る眼を開けると、そこには闇しか無く、体も解放されていた。

「たちの悪い悪夢だ。」男は呟いた。安堵した。

たん……たん……たん……

再び聞こえてきた足音に男はびくりとした。しかし、びくりとしたのを最後に男の体はまたもや動かなくなっていた。またも金縛り。声も出なかったが、それが金縛りのせいなのか、恐怖のせいなのかはもうわからなかった。

たん……たん……たん……たん……たん……
たん……たん……たん……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7070j/>

ふぁいのこばなし

2010年10月28日07時50分発行